

# 慈濟 230 ものがたり

慈濟基金會  
2016年2月

TZU CHI ● ツーチー



2016 ● 2

慈濟ものがたり

N O 2 3 0

慈濟基金會

今月の表紙

台湾 ありがとう！

清貧なモザンビークの人々にとって、慈濟ボランティアが配付する台湾からのお米をもらえることが、とても嬉しい。彼らは口々に台湾ありがとうと言った。

(撮影・蕭耀華)



表見返し●

文・證嚴法師／訳・濟運／撮影・李白士

## 過ぎた時間に感謝し 敬虔に新年を迎える

感謝の気持ちで過ぎた時間を見送りましょう

平穩無事に過ぎし

今日を迎えられたことに

つねに感謝すべきです

敬虔な心で新年を迎えましょう

敬虔に人、事、物に接し

全てを丸く治めるのです

つねに敬虔な心、感謝の心があれば

日々、和気藹々と平穩に過ごせ

目出度い福のある新年を迎えることができます



# 目次

【世論】	最高の相棒	慈願／訳	4
【主題報道・モザンビーク】	清貧の富者	慈願／訳	8
【人医の愛】	障害者の口の健康を守る(下)	黒川由希／訳	28
【特別報道・パリ気象サミット】	□気温の上昇を1.5度に抑制し 地球環境を蘇生させよう	濟運／訳	42
	□気候変動が健康に与える影響	濟運／訳	54
【證嚴法師のお諭し】	命がけの奉仕ゆえに貴い命	慈願／訳	66
【国際援助・シエラレオネ共和国】	エボラ出血熱の治療施設へ赴く	黒川章子／訳	76
【喜びの発見】	敗北を認めず 自分を啓発し続ける	黒川章子／訳	86
【衲履足跡】	信念を貫いて、忍耐力を高めよう	心嫻／訳	100
	慈濟大事記【十二、一月】	濟運／訳	106
	過ぎた時間に感謝し、敬虔に新年を迎える	濟運／訳	表見返し
	静思語	慮愍／訳	65
	漫画《清らかな智慧》	濟運／訳	裏見返し

## 最高の相棒

◎ 訳・慈願

二〇一五年、世界の気温上昇が最高記録を更新した。十一月末に国連気候変動枠組み条約第二十一回締約国会議（COP21）が、フランスのパリで行われ、各国は自国の利益要求を抑え、世界温暖化を緩やかにするため二酸化炭素削減を目指す協定に合意し、ついに採択された。二〇〇九年、コペンハーゲンの会議で合意に達成できなかった二酸化炭素削減の取り組みが採択されたことは、人類が地球を救おうと慈悲を示したものと言える。

十二日間にわたる会議には、世界のリーダーと非営利組織代表ら三万人以上が参加していた。対策の上では先進国と発展途上国の間に少なからずの論争が起きた。また、直前にパリでテロ事件が発生し、会場の内外は怒りと不安で動揺していた。気候によって頻繁に発生する災難を防ぐことができない人類は、深刻な存亡の危機に直面している。

工業大国が二酸化炭素削減を承諾したことは、人類の「最高の相棒」となる目標がかなったことを証明している。この概念はハーバード大学の生物数学家のマーティン・ノウックが提唱したものだ。彼はゲーム理論を用いてダーウィンの競争進化論を否定した。細菌やアリ、さらには人類に至る種と生には優れた感情がある、すなわち「利他と助け合う精神」があると仮定し、超越した自己本能の集団的生存合作であると言う。

物種進化論は有情合作による必要がある、その上で冷酷非情な競争は、人類

が相互に依存するためにはなくてはならないものであり、また人類の霊的な表れであり、さらに生命を癒す道でもある。

この度の国連気候変動枠組条約国会議に慈済基金会は三回目とも招請依頼を受け、環境保全に努力していることを発表した。とくに、個人の生活習慣が昔に回帰していること、どんなに小さなことでも二酸化炭素減少のために努めていること、使い捨ての食器を使用せず省電、節水、なるべく自家用車を使わないこと、資源の再利用などを述べた。

一九九〇年に、證嚴法師は「拍手する両手で環境保全をしましょう」と呼びかけ、高度成長期を経て大量のゴミとなった物のリサイクル運動を推進した。家庭にある新聞や雑誌、ペットボトル、空き缶、電気用品などを回収して再生資源にした。ペットボトルは回収した後、繊維に再生し、衣類や保温性の高い

毛布に再生している。

二十年来、台湾全土に五千カ所の環境保全センターを設立している。数万人のボランティアが日々回収と分類作業に携わり、物の大切さを体得し、使える物はその物命を伸ばしている。八十、九十を超えた高齢ボランティアたちが模範となって、回収物を使える物と再生資源に細かく分類している。

年の暮れになると證嚴法師は全国を行脚され、自ら慈済委員に「福慧お年玉」を授けられる。多くの環境保全に従事している古参菩薩も例外ではない。年月を経た素朴で温かい面影の中にある利他の情と実践の智慧に敬意を表した。彼らは人類の「最高の相棒」であり、模範でもある。



【国際援助・モザンビーク】

## 清貧の富者

◎文・鄭雅孀／訳・慈願／撮影・蕭耀華

うれしい時、苦しい時、辛い時

モザンビークの現地慈済ボランティアは

歌と踊りで感情を表す。

「どのくらいのお金があったら慈済に入れるの？」

「私たちはお金がないの、私たちは愛があるだけよ」

現在二千三百人いる現地人慈済ボランティアは、

その九割以上がかつて貧困者ケアを受ける側だった。

彼らは過去、貧困者であっても、今の心は豊かである

貧困者がどうやって貧困者をケアできるのか？

彼らはこの困難な仕事をやってのけた。

## 【マプト港】

アフリカ海岸を漂う小舟がゆらゆらとマプト港へと入っていく。モザンビークの首都マプトは国の南端の南アフリカと国境を接する海岸都市だ。モザンビークは470年間にわたるポルトガルの植民地統治を経た後に独立した。しかしその後16年間の内戦で財政は衰退し、国連の評価では世界経済の順位は低く、国民の生活は困難で外部の支援を必要としている。



ジンバブエ

モザンビーク  
マプト港

### 【モザンビーク紹介】

面積；801,590平方キロ（台湾の約22倍）

人口；2600万人

語源；ポルトガル語



【TWINSON】

莫大な量のゴミの中で、1人の女性が廃棄物の中から金目になる物を探している。

ホウレニー地区にあるバカニアのゴミの山は首都マップトに近く、面積はサッカー競技場数個分の大きさで、700世帯の住民がゴミの中から拾った物を持って生計を立てている。しかし、ゴミの中から生活に役立つ物を求めるのは容易なことでない。なぜなら、ゴミの山は組頭が統率しており、各区域を組頭が取り仕切っているからだ。

ゴミの山がいつできたのか定かではない。2017年には撤去される計画だが、その後700世帯の住民はどのように生計を立てればいいのか。誰もその答えを出すことができない。

二〇一五年十月中旬、モザンビークの首都マプトのマタントニー区に美しい情景が広がっていた。春から夏に移行する季節に太陽は燦燦と輝き、黒光りする肌の住民を均等に照らしていた。彼らは皆微笑みながら、黄砂の地上で整然と並んで、福慧ベッド（簡易ベッド）が配付されるのを待っている。ベッドを受け取ると、老若男女問わず誰もが頭の上に乗せて歌い踊り出す。まわりの人々も手拍子に合わせて歌い、熱気に溢れていた。

この活動はモザンビークにおける、慈済ツチが行った一回目の配付で、この度の対象は水害被災者だった。

毎年の十二月から翌年の二月まではモザンビークの雨季で、近年猛烈な熱帯気流が発生している。とくに二〇一四年末から翌年初めにかけての豪雨はモザンビークと近隣諸国に重大な被害をもたらした。モザンビークの中北部の主要な道路と橋は寸断され、百五十九人が犠牲になったほか、十五万人以上の避難民が出て、食糧難に陥っていた。

南部の災害はそれほど大きくなかったが、百世帯以上の住民が家を失い、マタントニー地区の住民五十一世帯が福慧ベッドの配付を受けていた。彼らの住居は窪地にあつて排水施設がなく、短時間の雨

でも家の四分の三が入り混じった雨水と排泄物に浸かってしまうため、地勢の高い百メートル先へ引越している。

十カ月過ぎても被災地の水は引かず、台湾からの移民でモザンビーク南部に住む慈済ボランティアの蔡岱霖は、「蒸発するのを待つしかほかに方法がありません。また伝染病を媒介する蚊の温床になりかねません」と説明した。

住民は移転して以来、今になっても電気も水もなく、歩いて十分先まで水を取りに行かねばならない。それに茅葺やスチール、ビニールなどで組み立てた家は、雨風を防ぐのみに過ぎない。

住民のセリナは三人の子供と三坪の家で生活し、毎晩不安に襲われて「夜、風の強い時は屋根が吹き飛ばされないかと心配で座って寝ています」と言う。隣の人がありにかまれた、または蛇にかまれて死んだと聞くとさらに恐ろしくなる。

マプト市に隣接する工業都市、マトラ市もまた水害に遭った地区で、被災者は避難所に入っていた。二〇一五年四月、市政府は七十世帯をモハラツ地区に移転させた。この地域とモタトニは慈済が被災者に関心を寄せている地区だった。

世界銀行の統計によると、二〇一四年のモザンビークの国民の平均所得は

六百三十米ドルで、平均一人一日当たりの収入は二ドルにも満たない。現地の百メティカル(約三百八十円)に相当する。質の悪い油と三個のパンが買えるだけの金額である。二〇一五年後半、生活用品のほとんどが値上がりして、さらに多くの人の生活水準は平均値以下に下がって、ゴミに頼つての生活を強いられた。また一杯一メティカルの氷水、一袋三メティカルで売った僅かな収入で糊口を凌がねばならない。

一九七五年、モザンビークは四百七十年の長きにわたるポルトガルの植民地支配から独立した。その二年後は、十六年にき継がれてきた貧困と病気、そして文盲という伝統は彼らにとって難題となっている。

この國の五百年あまりの動乱の歴史を深く知れば知るほど心が痛む。このような背景が間接的に国民の猜疑心、嫉妬心を造成して互いに信じあえないため、助け合いの観念に欠けている。

蔡岱霖は二〇〇八年にモザンビークに移住した後、現地の歴史と文化について

●ボランティアたちは歌い踊りながら福慧ベッドを体が不自由な人や年寄りの家に運んでいる。沿路や付近の人たちも喜びにつられて一緒に歌っている。

わたる内戦が勃発し百万人以上が死亡、人口の四割が外国へ移住し、モザンビークは新たに経済インフラを構築した。しかし農地は荒れ果て、さらに大規模の飢饉を引き起こした。

### 引き継がれてきた貧困

現在、内戦が終わって二十二年になるモザンビークは、豊富な鉱産や天然ガスが埋蔵しており、近年急速に経済発展を遂げている。しかしながら、その見返りとして得た富は社会の底辺にあるほとんどの国民とは無縁で、百年来先祖代々引



知った。二〇一二年に慈済委員の認証を受け、頻繁に現地社会に入ってボランティアをし、彼らと親しく付き合ってきた経験の中から観察したことは、「彼らの生活環境は悪く、貧しいゆえに自分のことしか考えていません。ですから私たちがどんな因縁でこの土地に入っているのかを考え、小さな機会もとらえて、利他の精神、助け合い、感謝などがもたらす心の財産について話してあげなければなりません」と言う。

現地人で慈済に加入して二年以上になるボランティア幹部のビクトリアテ・マニッチ、レベカ・マブンダ、ポーラ・マ

うと努力した。

「私たちは自分たちが経験してきたことを話します。私たちもあなたたちと同じようにお金がありませんが、でも人を助けている中で自分の幸せを感じます。奉仕した後、心の中は前よりも楽しく、さらに満足感でいっぱいになります」と。

ボランティアをしている酋長アマリコ・ガレロは「水災後、多くの団体がきて私たちの状況を聞いていましたが、慈済だけは最後まで関心を寄せてくれました。ですから私は村人たちに私たちも愛の心を發揮して近所で困ったことがあつたら、金のある人は金を出し、力のある

レンチやシレス・アフレッドは異口同音に言う。「被災地区に入った時、皆が座つて支援を待っていることを私たちは不思議だと思いません。私たちも以前はそうでしたから。自分は貧しいから他人が助けてくれるのは当たり前と思っていまして」

被災者はボランティアが掃除をしたり、いろいろなことを聞くのがうるさくなつて「あなた達はどこからきたの?」「どうして私たちの手伝いをするの?」と聞く。ボランティアたちはそれにいちいち答え、上人の大愛を説明して、皆に慈済とボランティアについて知ってもらお

うと努力した。人は力を出して互いに助け合おうと言っています」と言っている。

現在、両地域のボランティアは八十人近くになっており、普段は地域のケア対象者に食事の供給や訪問ケアなどをしている。やればやるほど笑顔がひろがっている。

### 慈悲の心が伝染する

この度の大雨で、多くのボランティアの家も浸水の被害を受けた。彼らは家の整理をすませると、お互いに連絡をとつて各地の被害状況の確認に努めた。一人



暮らしのお年寄りには湿った古いベッドの上で孤独な生活を送り、体が不自由な女性には六人の子供をかかえて呆然と水を見つめるばかり、長期ケアを受けている世帯の草葺きの家は雨によって倒れているだろうか、などなどの問題が山積していた。

こうした惨状を目にした現地ボランティアが「私たちはまだ経験がないのでどこから手をつければいいのか分かりません」と訴えたため、翌日幹部たちは実地調査をもとに緊急配付について話し合った。

活動内容が決まり、蔡岱霖がゆつくり

と活動の方法を説明すると、ボランティアは各組に分かれ、被災者が最も必要としていることについて再び話し合い、実地調査をもとに清掃、食事提供、必需品配付を行うための名簿を作成した。「この機会に彼らができます組織だった能力がつくようにと願っていました。彼らはその後素早く、衣類や物資の募集に取りかかり配付の準備をしていました」

その後も蔡岱霖はボランティアに付き添って、湿った悪臭漂う被災地、蚊の媒介地の劣悪な環境の中を行ったり来たりし、喘息の発作に襲われただけでなく、マラリアにまで感染した。「骨まで凍るよう

な寒さと全身の虚脱感に襲われ、病院に数日入院しました。帰宅してからも何週間も休息しなければなりませんでした」と言った。

何人かのボランティアも実地調査を行った後、下痢や頭痛を起こしたが幸い休息し、回復できた。蔡岱霖は、「自分が病気の苦しみに遭ったから他人の苦しみが分かったことに感謝しています。そして、

●水害の時、蔡岱霖とボランティアが一人暮らしのおばあさんの家を見て、湿ってカビの生えているベッドに寝ているのを見るに忍びず、福慧ベッドを送って新しいシーツを敷いてあげ、温かく安心して眠れるよう祈った。

●被災者の家は大部分が木を組み立て、ビニールや葦で覆っている。福慧ベッドを受け取ると早速組み立てて、子供がすやすやと眠っている。

さらに水に浸かって生活している人たちのために尽くします」と言う。

蔡岱霖の病氣療養中、ビクトリアたちはお互いに励まし合って活動を進めた。「デニス（蔡岱霖の英語名）が病氣になったから、自分たちで勇気を出して頑張りましょう」と、蚊帳や浄水剤、生活必需品を配付し、定期的に貧困者の訪問ケアをして彼らの苦しみの言葉に耳を傾け優しく接していた。あるボランティアは訪

問の様子を文字や映像に記録し、ネットに詳しい人は定期的に救済活動の進捗とモザンビーク慈済のホームページに流していた。それを見て感動した現地の実業家は、献金や物資を送ってきて、善の力がますます広がっている。

二〇一五年五月の仏陀の生誕日に、モハラルで盛大な灌仏会の儀式が行われた。荘厳な儀式にモハラツ市の市長夫妻が参加し、慈済の理念に賛同した。またボランティアの被災地での支援活動に感動して、平坦な高台を「慈済大愛の村」の建設地として提供し、被災者が安心して暮らせる家を得られるように期待した。



### 慈済の家に心身の安息

二〇一五年十月下旬の週末の早朝に、百人のボランティア幹部が倉庫の前に柱をたて、ビニールを被せた臨時の教室で講義を聞いた。講義が終わると戸外のマングローの木の下で輪になり、講義の感想を語り合っていた。その傍では炊事係が大愛農場から採ってきたカボチャやキャベツなどの野菜を煮込み、辺り一面に香ばしい匂いが漂っていた。

モザンビークの実業家陳春発は、慈済ボランティアの活動に感動して二〇一四年、所有していた土地を慈済に提供し



た。四年も放っておかれ雑草の生えたその土地をボランティアたちは開墾して、六十七本あったマンゴーの木もそのまま残した。また「被災者雇用制度」で被災

者自らが作ったレンガで「大愛農場」の塀を囲い、家の中にはトイレ、水、電気のほか、米など配付物資の貯蔵室も完備している。皆はここを「慈済の家」と呼び慣れ親しんでいる。

普段はボランティアの集会所として使用して、大型の配付活動や七月の吉祥月のイベント、灌仏会、年末祝福会の行事

### 【マンゴーの木の下で】

モザンビーク首都付近のマハタにある「慈済の家」に20カ所から来たボランティアがマンゴーの木の下で初めての「本土ボランティア研修会」を行った。慈済早期の足跡を顧みると、当時の時代背景と現在のモザンビークはよく似ている。

もここで行われている。二〇一五年には

二日間の「本土幹部研修会」も行われた。器材も揃えられ、研修科目もよく考えられ、講師から炊事係まですべて備えられたこの研修会に、期待のほどが窺われた。

二〇一二年八月から、南アフリカのダーバン国際ボランティアは九回にわたって九百キロ先のモザンビークへ行つて、慈済志業を始めたばかりの蔡岱霖と、地域の奉仕に対する方法と今後の計画について会議を重ねた。モザンビークの現地ボランティアは年々成長している。彼らはまた、スワジランド、ヨハネスブルグ、ダーバンの現地研修会にも参加してい

る。

慈済に加入して三年、今回のカリキュラムの企画に関わっているフェイスは、「他国へ研修に行きたい人は大勢いますが、人数には制限があります。行けない人のために、私は吸収した経験をもって自分たちの研修会を開いて、さらに多くの人がボランティアに参加して、慈済精神を深く理解できるように願っています」と話す。

研修会では礼儀を正して、それぞれが自分の体験や会得したことを発表した。そして艱難であった慈済初期の「竹筒時代」を描いた映画を見て、課程は午後九時

半に終わった。マンゴーの木の下に蚊帳を張って、ボランティアたちは今まで体験したことがなかったことを経験した。次の研修会ではもっと日程を長くしたいと言いかうのであった。

### 情緒溢れる歌声に愛を以て共鳴

モザンビークのボランティアたちは、喜びや悲しみを歌によって表現する。美しい歌声にのせて、祈祷、感謝、祈りを捧げる。

普段はキリスト教の教会へ行っているので、メロデーは教会で歌うものであ

る。だが、歌詞はその時々 の出来事や状況によって即興で作り上げ、周りの人もすぐに呼応する。

「どのくらいのお金があったら慈済に入れるの？ 私たちはお金がないの、私たちは愛があるだけよ」という歌詞がある。

蔡岱霖は「いつも思うのですが、貧困の人がどうやって貧困の人を助けるのかと。でも彼らはそれをやってのけました。彼らの生活は依然として貧しいですが、二〇一二年から二〇一五年まで歩んできました。これからも愛をもって歩き続けて行くと思っています」と力強く言った。



〔人医の愛〕

# 障害者の口の健康を守る (下)

## 林鴻津

◎文・陳歆怡／撮影・楊子磊  
訳・黒川由希

●林鴻津は患者や家族、施設の介護スタッフと苦楽をともにする。いつも優しい笑顔の林おじいさんは、毎回のふれ合いを大切に、暖かな愛を人々に伝える。

## 日本視察の衝撃

長年僻地の口腔保健事業を推進してきた林鴻津であるが、五十歳を目前に日本の障害者歯科医療サービスを視察したことで、後の人生の使命を見出すこととなった。

「本場に衝撃の旅でしたね！」。台北医学大学とともに日本の福岡県を訪れ、障害者の口腔ケアモデルを視察した際、一般の診療所で接した重度障害者のほとんどが虫歯ゼロ、歯周病ゼロであることを知った時のショックを林鴻津はこう話す。定期回診で通常検査を行う際の、医

療スタッフと患者及びその家族とのコミュニケーションも自然で温かみの感じられるものだった。

日本では一九六七年に北欧など先進諸国の口腔保健モデルを取り入れ、末端の歯科診療所から医学センターまでの三段階の口腔ケアネットワークを構築していた。鍵となる役割を担うのは公的医療保険の適用範囲で、出張サービスを提供する「歯科衛生士」である。末端の歯科医から通報を受けると、ただちに個別にそれぞれのケースを引き受け、医療サポートを行うだけでなく、身体の不自由な人や高齢者の自宅へ赴き、歯磨きや衛生教

育、虫歯予防の飲食指導などを実施する。この政策を実施した後、日本の障害者の齶蝕罹患率は目に見えて低下し、今ではほぼ虫歯ゼロを達成した。

この日本への視察旅行では終生忘れることのできないショックを味わい、台湾の障害者の口腔ケアのために力を尽くすという願を立てることになったと林鴻津は話す。

彼はまた、日本視察の同年、台湾では社会を揺るがす医療事故が起きたことを覚えている。フアロー四徴症（重度の心疾患）を患う十歳の楊少年が、多くの虫歯があったために全身麻酔で「補綴治療

手術」を行うことになった。手術は無事成功し、楊少年は術後小児ICUに入院し、経過観察することとなった。ところが翌日の午前中、小児科医が楊少年の気管内チューブを抜いたところ、少年は意識不明に陥り、気胸と出血性ショックを併発して死亡した。この医療事故はその後長く続く民事訴訟へと発展し、歯科医が障害者への医療をより一層厄介なものとみなす後遺症を残した。

林鴻津が日本の歯科医にこの問題を話したところ、ある医師から核心をつく質問を受けた。「なぜ台湾の保護者は子供の虫歯を放っておいたのか。なぜ行政は障



●カンボジアの大きな木の下で、林鴻津は、現地の人に通訳してもらいながら口腔保健知識を講義する。

害児の口腔保健を軽視していたのか。なぜ障害者団体は歯科医をバックアップしなかったのか——と。「この三つの質問を聞いて、私は障害者口腔ケア分野において、台湾はまだまだ発展途上であることを思い知らされました」と林鴻津は話す。

深い反省の念を抱いて帰国して間もなく、林鴻津は八里愛心教養院と出合った。その後二年間、彼は入所者全員及び職員

とともに口腔保健救済大作戦を展開する一方、日本に学び、また東京歯科大学から海を越えて経験を伝えることで、ようやく形勢を逆転することができた。

## 口腔救済大作戦

新北市唯一の「公立」障害者養護施設として、八里教養院は二歳以上十八歳以下の重症心身障害児を受け入れており、およそ百五十人が入所している。

当初、歯磨きが定着するかどうかの確信はなく、長期的に取り組むつもりもなかったと林鴻津は打ち明ける。「それでな

くても介護スタッフの負担は大きく、反発は免れませんでしたからね。でも歯磨きを定着させないなら、いくら治療しても治療しきれるものではないのです」。林鴻津は前院長の郭美雀に三つの条件を出した。一つ目は四カ月後、入所者全員の歯の頬側（比較的に磨きやすい外側）を清潔にすること。二つ目は十カ月後、入所者全員の歯の舌側も清潔にすること。三つ目は第一線の介護スタッフは皆、必ず真面目に入所者の歯磨きを行うこと。そして一人でも協力しないスタッフがいれば自分は辞めると伝えた。

こうしたハードルの高い条件を郭前院

長は即座に了承したのみならず、「もし私たちがこの条件を達成できたら、先生は好き勝手に辞めてはいけませんよ」と逆に要求を出してきた。こうして林鴻津と教養院は歯磨き大作戦を開始したのである。

ベテラン養護教師の戴明秋は、医者は医療の専門家で、歯磨きの技術については概念を伝えることしかできず、実際の歯磨きについては介護スタッフが行う中で模索し、学習するしかなかったと話す。戴明秋はまた「最初の頃多かった失敗は『空磨き』です。後になって指で頬の両側を開き、目で歯を見ないとちや

んと磨けないことが分かりました。しかしその後も強く磨きすぎ、入所者の歯茎が萎縮したり、潰瘍ができてしまったりすることもありました。適当な力加減をつかむため、介護スタッフはプライドを捨て、互いに磨きあつて練習しました」と言う。さらには調理スタッフも歯にくっつかない食事を開発するために知恵をしぼり、おやつについても厳しくコントロールするようになった。

現在、介護スタッフはみな「柔を以つて剛を制す」という歯磨き法を身につけている。それはまず緊張しやすい入所者の肩や頬をマッサージし、次に手袋をは

めた手で歯茎をマッサージし、徐々に緊張をほぐしていき、続いて手早く入所者の頭を胸に抱き、腕の内側で頬をしつかり押さえてから歯磨きを行うのである。

「みながこんなに真面目に努力したのは、林先生という『よそ者』が苦勞を厭わず、折に触れては『突撃検査』とサポートにやって来て、自費で歯磨きの器材を購入し、私たちが完全に家族と見なしにくれていたからです」戴明秋は言う。

歯磨き作戦の成功には鉄血政策だけで

●八里愛心教養院で、林鴻津医師がやさしく入所児童たちの歯を診療している。



は不十分で、重要なのは入所者に歯磨きを好きになってもらうことだった。「歯磨き運動を開始して半年後、ある日突然数人の入所者が自発的に別の子供たちの歯を磨き始めました。それを見た林先生は、比較的運動機能の高い入所者のために歯磨き指導の教室を開くことにしました。子供たちがついてこられるか最初は不安でしたが、数回教室を開くと、歯磨きコンテンツをしようよ、と子供たちの方から提案してきたのです」。陳麗雲はこう話す。

こうしたコンテンツと賞品、さらには歯磨き芝居まで演じたことで、みなはスタッフがおよそ五名の入所者を担当し、食後の歯磨きには毎回四、五十分かかる。「私たちはスピードは求めています。求めるのは清潔さです。口腔ケアは健康のもとですからね」。こんなシンプルな信念が職員全員の暗黙の了解となっている。

## 赤ひげ先生、今後も奮闘

二〇〇八年、台北医学院は衛生署の委託を受け、BOT方式で双和病院を設立し、また全国初の障害者専門の口腔ケアセンターを設置し、百坪近くの空間に専

気が上がっていった。第二回歯磨きコンテストの際には、林鴻津はサプライズを用意していた。歯磨きの成績の優秀な十五名の入所者、三十名の介護スタッフ、十三名の事務スタッフを、中華民国歯科医師公会全国聯合会の日本口腔保健制度視察に同行させ、その道すがら東京ディズニーランドも観光したのだ。歯磨き子どもたちにとって面白いものとなったのみならず、歯磨きは子どもたちを夢の旅に招待することにもなった。

今では食事の後、介護スタッフと入所者は、誰が号令をかけるわけでもなく自然と歯磨きの準備にかかる。一人の介護門の診療室、鎮静麻酔手術室及び衛生教育エリアを設け、医療と衛生教育の両立を標榜した。

ここの最大の特色はやはり「人」である。開業医の身分で双和病院の特殊歯科を支援する葉必信歯科医は、「特殊歯科の必要とする医療技術は決して難しいものではありません。最も重要なのは障害者を「人」として見ることです。障害者の患者が来たら機械的に口を開けさせるだけ、というのではなく、感情を持って患者さんと話をしたり、冗談を言ったりしてコミュニケーションをとらなければなりません。いわゆる障害者に対する『行為



●協調運動障害があるものの、八里愛心教養院の脳性麻痺のこの入所者は、毎食後、いつも真面目に十数分かけて自分で歯磨きをする。「歯を磨くのも、林先生も大好き！」と彼は言う。

制御』とは、医者がまず自分の情緒をよく制御して、感情を落ち着かせ、リラックスし、尊重と寛容の態度をもって障害のある子どもたちに接することです。こうしてこそお互いに成長し、かつよいフィードバックが得られるのです」と述べる。

双和病院の黄茂栓歯科部主任によると、この全国初の特殊歯科センターは、林鴻津の提案のもと、台北医学大学の李祖徳理事長と邱文達学長が社会奉仕という姿勢で設立、林鴻津が歯科医達を率い、一年目は完全に無料診療を行ったおかげで、センターのスタートが支えられたと

いう。「今では双和病院特殊歯科の名声は高く、一年に延べ八千人にサービスを提供しています。また特殊歯科医療ネットワーク構築計画という政府の政策にも影響を与えています。これら全ての発展は、どれも林医師の優れた施設へのこだわりのおかげです」と黄茂栓主任は話す。

障害者口腔ケア分野の先駆者として、林鴻津は歩みを止めることはない。最近でも彼は、台大病院特殊歯科に教育課程を開設し、講師を務めたのみならず、自ら進んで自閉症と認知症に関する講座も聴講した。論文に目を通し講義教材の修正に毎晩一時間を費やす彼はこう話す。

「もう何百回も講義しているのに、どうしてまたあれこれと手を加えるの、と妻からは言われますが、一度一度のチャンスをお大切に、それぞれの学生に合わせた教育を行い、時代とともに進歩してこそ、さらに多くの人を引き入れ、ともに改革を行えるのです」

林鴻津の次のステップは、高齢者、持続的意識障害者、精神障害者などより弱い立場にある人々が、十全な口腔ケアを受けられるようサポートすることである。予防が治療より重要であることを知る彼は、「この数年政治家が「高齢者が無料で入れ歯を作るための補助金」を選挙公約と

二〇一三年、林鴻津は障害者の口腔ケアに長年携わったことから医療貢献賞を受賞した。彼はこの絶好のチャンスをつかえて、「事前の予防、歯磨きの励行、歯科へのニーズを減らすことこそが上策なんです」と総統に直接建言した。ただしその効果は芳しいものではなく、高齢者の口腔の健康は、なお解決の待たれる問題である。

道のりは決して平坦ではないが、林鴻津はあくまで障害者やその家族、介護スタッフと同じ立場に立ち、精神的、実質的な温もりを送り続け、決して意気消沈することはない。「考え方が1%でも変わ

することに反対だ。「多額の公的資金を投入しても補助金で作られる入れ歯は安物にならざるを得ず、品質に期待することはできません。それよりは資金を衛生教育に用いる方がよいのです。一年三千万元足らずで、安定して持続的な効果を得られるのですから」。林鴻津は担当部門の官僚に意見したこともあるが、「高齢者に資金をつぎ込むなんて無駄だ、というのが向こうの答えでした。これこそ官僚意識なんです。行政の負担を増やしたくない、ただ金をばら撒いて票を集め、後は歯医者任せればいいと思っっているんですから」と疑問を投げかける。

ればチャンスが生まれます。実際に行動に踏み出せば、自分を変え他人を変え、さらに多くの人を幸福にできるのです」。林鴻津は青年から老年に至るまで自己の人生哲学を実践し、障害者など特殊なニーズを持つ多くの人々に良質の口腔ケアを提供してきた。そのおかげで彼らは今、自信に満ちた明るい笑顔を浮かべることができるのである。

(経典雑誌二〇八期より)



# パリ気象サミット

## 気温上昇を1.5度に抑制し 地球環境を蘇生させよう

フランス・パリで行われた国連気候変動枠組条約第二十一回締約国会議（COP21）の共同宣言で、地球の気温上昇を二度以内に抑え、できれば1.5度以内に抑えることを目標に定められた。慈済が同会議に参加するのはこれで三回目であり、「行動に移そう。気温の上昇による災難をくい止めよう」と訴えた。

◎資料の提供・慈済アメリカ総支部、マレーシアクアラルンプール支部／訳・済運／撮影・裘曜陽



## 会

議は十一月三十日から十二月十二日までフランスのパリで開かれた。慈済基金会はNGOとして、ポーランド・ワルシャワで開かれたCOP19、ペルー・リマで開かれたCOP20に続き、三年連続招請を受けて同会議に参加し、今回初めて会場で記者会見を行った。

慈済ボランティアは会場に宣伝ブースを設置し、世界中のボランティアが愛の奉仕をしていることを知ってもらうため活動内容を展示したほか、英語、フランス語、

ドイツ語の字幕が入った證嚴法師の講演ビデオ「地球と共生する」を放映、この会議を機に人々が環境保全を行動に移すよう呼びかけた。

百九十五カ国がこの重要な会議に参加し、うち百八十五カ国がCOP2削減と省エネに関する協定会議に参加した。そして、百五十カ国の代表が十一月三十日と十二月

●パリ会議のメイン会場の外には195の参加国の旗が立っている。各国の元首とNGOの代表が一堂に集まって地球の温暖化問題で共通認識を模索する。



一日の会議で宣言の内容を発表した。それは史上初めて参加国全ての国が温室効果ガスの排出削減に合意し、「史上最も煩雑かつ影響力のあるグローバルな協定」を結んだのである。COP21で採択された協定は二〇二〇年に発効となる。

## 慈済の環境保全が国際舞台で認められた

「私たちは気候の変動に直面して何をしたらよいのか。地球のために何ができるのか。證嚴法師は行動をもって『地球と共生する』姿勢を表す必要があると言

っています」。慈済米国総支部の曾慈慧副執行長が記者会見で慈済の気候変動に対する努力を語った。

慈済基金会は国連NGO加盟団体として招請を受け、今回初めて正式に会議への参加登録を行った。記者会見を四回、シンポジウムを一回行ったほか、テレビ局の生中継インタビューなどを行ったため、各国のメディアが関心を寄せ、ロイター社やヨーロッパニュースが報道した。

記者会見では台湾、アメリカ、インドネシアから参加した慈済ボランティアが、慈済の長期的な環境保全活動の成果と方法を説明すると共に、来場者に「自然を

愛し、良縁を結ぶ」考え方、すなわち、異常気象による災害が頻発する今、慈済がどのような着実かつアイデアに満ちた方法で災害支援を行っているかを紹介した。

中でも十二月四日に行われた三回目の記者会見は少し特殊であり、宗教の違い

●慈済基金会は3年続けて同会議に参加しているが、2015年に初めて他の宗教団体と共に記者会見に臨んだ。左から「信仰と科学の結合」(United Planet Faith & Science Initiative)の創設者スコット・スチュアート、インドネシア多民族センター(CDCC)主席のディン・シャムスティン博士、慈済米国総支部の副執行長曾慈慧、大愛テレビ気象アンカーの彭啓明。



●NGO展示会場には200のブースが並んでいるが、他にも数多くの団体が参加を望んでいる。それ故、主催者側は参加者に共同で参加する方法を提案した。慈済はユニセフに属する「地球を救う会」及び気候変動学術会と共にブースで展示している。慈済は福慧ベッドと毛布を展示した。「地球を救う会」はフィリピンの子供が天災で家を無くした光景が描いた絵を展示した。(撮影・林志勇)

を超えたものだった。同席したカトリックの明愛基金会の代表者が、慈済の活動により多くの企業が参加してほしいと訴え、プロテスタントの代表も、世界の人々が月に一回断食をし異常気象による食糧不足に呼応し、今後どうすべきかを考えようと呼びかけた。慈済基金会代表は改

めて各宗教団体に二〇一六年一月十一日から始まる世界素食運動に参加するよう呼びかけた。

同日、慈済基金会とユネスコ傘下のフィリピン地球を救う基金会とワシントン気候学術基金会が共同でシンポジウムを開催した。慈済ボランティアは、仏教の生活教育の観点から自らのように行動すれば天災を減らせるかを考えていると説明した。南半球の代表は気温上昇に伴う海面の上昇がすでに島国に脅威をもたらしていることを挙げた。また、アフリカからの代表は森林の乱伐によって森林に危害が及び、生態系に影響が出ている

ことを説明した。

国連副事務総長を退任したばかりのユンケラ博士は、今回の会議で策略調整役を担当し、「過去の会議と異なるのは、フランス政府が温室効果ガスの排出削減を約束するだけに留まらず、具体的な方針まで示していることです。私たちは数多くの覚え書きに調印し、発展途上国が必要とする資源を獲得できるよう手助けするつもりです。慈済も含めてNGOが参加し、気候の変動にいかに対処するかを討論しているのはとても喜ばしいことです」と話した。



●2013年、台風ハイエンはフィリピンに重大な被害をもたらした。暴風は沿岸都市を襲い、巨大な船をも海岸に押し上げ、1万人以上の犠牲者を出した。温暖化で温められた海水は台風の勢力を強めた。気候の変動はより頻繁に極端な気象と災害をもたらす。それによって生態系は悪化し、社会は不安定になるだろう。(撮影・莊慧貞)

## 全世界同時に「素食し、殺生しない」運動を推し進める

百五カ国を超える代表が慈済の環境保全教育ブースを訪れた。ボランティアは英語やフランス語、ドイツ語、中国語で慈済を紹介した。

十二月二日正午、慈済台湾の代表である彭啓明、慈済アメリカの裘曜陽、慈済シエラレオーネ災害支援担当責任者ステイーブン・フォンバが会議専属のウェブテレビ局(COP21 WEB TV)のインタビューを受け、慈済が開発した多機能折畳式ベッド(福慧ベッド)を紹介

した。その災害対策用品はアフリカからの代表に大いに讃称された。

スリランカのメディア代表は慈済ブースを五回も訪れ、福慧ベッドの設計者が生命尊重の配慮をもってこのベッドを開発したことに対して、深く敬服していた。国連の事務員であるイブンサラは、福慧ベッドが病院や遠隔地に適していると言いつつ、耐用年数に関心を示した。

会期中、千百十人が慈済基金会の推し進める「素食し、殺生しない」キャンペーンに署名した。それは誰でもウェブサイトで署名できる。曾慈慧によると、多くの人は一年の初めに願をかけるので、一月

十一日をキャンペーンの開始日と決め、一年に一日だけ道徳的な飲食の日を定めるようにしてもらうのだ。そこから次第に一月に一日、一週間に一日、そして最後には毎日菜食するのが目標である。一から無量が生まれ、無量は一から始まるのである。

また、会議スタッフのメリン・イングリッドは素食運動に署名し、同僚にも参加を呼びかけた。彼女は慈済フランスのボランティアと意見交換するために連絡先を交換しあった。これからもっと多くの人の飲食習慣を変えたいと思っている。

活動の一環なのだ。「地域社会への関心に回帰すべきであり、考え方を変えて地球を護る精神を呼びかければ、気候変動の問題を解決することができると思います」

## 温暖化を抑えるには生活習慣から始める

会議の主席を務めたローラン・ファビウス外相は、今回の会議を成功に導いた立役者の一人である。二〇一四年にはペルーにスタッフを派遣し、積極的にCO2排出大国と話し合った。

フィリピン環境保全部長であるオーガスタも慈済のブースを訪れ、回収したペットボトルから再生された慈済の毛布を持ち帰り部署の人と分かち合いたいと言った。慈済は二〇一三年の台風ハイエンの際に真っ先に支援に駆けつけ、日当を払って被災者自身による町の清掃活動を展開した。「被災者は多くの物を失いましたが、慈済は国際災害支援によって物資の支援を提供したに留まらず、彼らに自分たちの価値を取り戻す手助けをしてくれました」とオーガスタは話す。

気候の変動に対して一人ひとりが何かをすべきであり、素食も一つの環境保全

二〇一五年の会議では、「気候変動に対する生活の変革は自分から始める」という概念が生まれた。会場には発泡スチロールや紙コップはなく、ゴミの量は昨年の会議の三分の一になっていた。もっと改善する余地はあるにしろ、今回は最も系統だった人道的な会議であった。グリーンライフ・パビリオンでは人力パソコン充電器や手動ジュースなどが展示され、人々に日常生活の習慣を適度に変えるだけで、温暖化を抑える力になりうることを教えている。

それよりも重要なのは、政府が地球の温暖化を重視し、協力して実行に移すこ



●東京の夜景。世界の半分の人口が都市に集中しているが、エネルギー消費で排出される二酸化炭素は都市が7割を占めている。とくに商業地での排出元はエアコンや照明である。もし、人々が生活習慣や考え方を変わることができれば、それが温暖化抑制力になり得る。(撮影・楊舜斌)



PARIS2015  
CONFERENCE OF THE PARTIES UNDER  
THE UN FRAMEWORK CONVENTION  
ON CLIMATE CHANGE  
COP21-CMP11

## 地球の現在と未来

- ・二酸化炭素は地球を温暖化させている主な温室効果ガスである。
- ・大気中の二酸化炭素の濃度は2015年に過去最高を記録した。
- ・2015年の世界の気温は科学者が記録を開始してから最も高くなった。
- ・過去百年の間に地表温度は1度C上がっている。
- ・二酸化炭素を排出し続け、気温が上昇し続ければ、海面が上昇して沿岸都市は埋没し、三割程の動植物が絶滅する。また、台風の強度が増したり、真水が減少したりするようになり、気象難民が大量に発生する。
- ・国際連合国際防災戦略事務局（UNISDR）の報告によれば、過去20年間に気候と関係した災害発生の頻度は増え続け、60万人以上の生命を奪うと同時に数十億人が影響を受け、230兆円相当の損失を出している。

とである。会期中の十二月九日にフランス議会では全会一致である法案が通った。それは浪費を抑えるために、スーパーマーケットは賞味期限間近の食品を寄付するか飼料や堆肥に再生することを義務づけ、売れ残った食品の廃棄処分を禁じたものである。

ユモゲラ博士によると、二〇一五年のパリ会議で大まかな方針が決まり、二〇一六年にモロッコで開催される会議でより多くの生活に密着した個別案件が出てくることに期待している。慈濟は二十五年前から環境保全活動を始め、宗教と環境保全、科学、教育、人道、健康的

な飲食の促進などを融合させてきたが、その成果がより多くの国に重視されることを期待している。

2016年1月11日は  
世界素食デー (Ethical Eating Day)  
ウェブサイトから署名運動に参加しよう!  
<http://www.tzuchi.us/ethical-eating-day/>

## 気候変動が健康に与える影響

### 地球に影響を与えているのは人為的なもの

気候変動と人間の健康には深い関係がある。

台湾から唯一パリ気候変動枠組条約国会議の医療関係者による会議に招待された病院として、慈濟病院の医療関係者は素食と院内環境保全の経験を語った。個々の人間が行動を変えれば、気候変動を改善できると強調した。

◎文・謝明芳／訳・濟運

「二十一世紀に人類が直面する最大の問題は気候の変動と環境問題です。私たちはすぐにそれを食い止めるべきであり、手の施しようがなくなってから行動を起こそうとしても遅いのです」とWHO公衆衛生及び環境署署長のマリア・ネイラ博士がパリで行われた第二十二回気候変動枠組条約国会議（COP21）で語った。台湾の大林病院副院長である林名男も同感だった。

百五十カ国の元首と百九十五カ国の政界、学術界、医学界、工業、農業、製造業、芸能界、メディア、



●林名男副院長（左）は大愛感恩科技公司の製品「リサイクルマフラー」を手にとって、国際医療害のない団体のギャリー・コーン主席と意見交換した。（写真の提供・顔采如）

人権団体などからの専門家や学者など四万人がCOP21に出席し、付随的な会議も六百回開かれた。

台湾は国連気候変動枠組条約の正式な条約締結国ではないため、政府関係者はNGOや工業科学技術の学者という立場で参加した。「健康ケアと気候に関するリーダーシップ円卓会議」に招待されて参加したアジアの国の代表では、インドと中国のほかは韓国の病院と台湾慈濟病院のみだった。

大林慈濟病院の林名男副院長と地域医療部の顔采如が慈濟医療志

業を代表して、病院の気候変動に対する行動を説明した。「私たちは十一月に起きたパリ同時多発テロに怯えて欠席するよ  
うなことはなく、慈済が行ってきたことを世界に知ってもらわなければならない」と林副院長が言った。

「二十数年前から上人が、拍手する手でリサイクル活動をしようと提案してから、私たち医療志業でも省エネや二酸化炭素の排出減など、環境保全方面において一定の努力が認められ、今回の気象サミットに参加することができました」と林副院長は自信を持って言った。

気候変動が直接的または間接的に人類の健康に影響を与えているため、極端な気象や飢饉、蚊が媒介する伝染病などによる死亡率が既に上位五位になっている国もある。COP21で初めて気候変動と健康の相関関係を重視した。林名男副院長たちは十二月三日から三日間続けて「健康ケアと気候に関するリーダーシップ円卓会議」に参加して三十カ国の代表と討論したほか、気象サミットの付随的な会議である「国際医療害のない団体座談会」などにも出席した。

林名男は「素食と環境の関係」という題で講演した。資料で示すように、一キロ

## 食習慣が世界を左右する

二〇〇九年、COP15がコペンハーゲンで開かれた時、なぜ気候変動会議で医療と健康分野の人が参加していないのか、疑問が投げかけられた。氷山の溶解やホツキョクグマの絶滅危機に世界の関心が集まったが、もっと深く掘り下げて化石燃料を燃やした時に生ずる大気汚染による人体への影響を見つめるべきであった。世界中の屋内と屋外の大気汚染によって死亡した人数はエイズと肺結核、マラリアなどを合わせた死者数よりも多いのである。

の牛肉を生産した時に排出される温室効果ガスは野菜を生産した時の六、七十倍以上に達し、その上大量の水と農薬、肥料、エネルギーがその過程で消費される。樹木は二酸化炭素を吸収できるが、大量の雨林が伐採されて大豆やトウモロコシなど飼料に使うものを栽培すれば、大気中の二酸化炭素は増える。大豆やトウモロコシを豚や牛の飼料にすれば、動物

### □豆知識

牛肉類を1キロ生産する時に発生する温室効果ガスはニンジン1キロを生産する時の6、70倍以上になる。その上、生産過程で大量の水と農薬、肥料、エネルギーを消費する。



はメタンガスなどの温室効果ガスを大気中に排出する。とくに羊や牛は万単位で飼育されるため、そのガスは膨大な量になる。

そして、肉類は冷凍による鮮度保存、長距離輸送でのエネルギー消費、料理する時の解凍など、一連の過程で必要とするエネルギーと排出される温室効果ガスは膨大なものである。ある学者はその会議で、最新の研究によると、肉食は癌の一因であることが判明したと発表した。

慈済病院では長期に渡って素食を推し進め、二〇一一年の六つの慈済病院は合計二百五十四万三千六百六十九

食分の素食を提供したが、それは二百四十三万九千三百七十九キロの二酸化炭素の排出削減をしたことに他ならない。

「食と生活習慣の気候への影響は非常に大きいのです。世界を変えようとするなら、食習慣から変えなければなりません」。林名男のこの報告は数多くの国際的な医療や健康産業のリーダーの関心を集めた。中でもアメリカのブレナ・デービスとネパールのマエシュ・ナカーミは、これまで食のエコに対する影響をあまり考えて来なかったと感想を述べ、会議の後に林名男の所に来て教えを請うた。

## 二酸化炭素排出削減、災害復旧、リーダーシップ

慈済医療志業と国際害のないヘルスケアグループ（HCWH）は長年協力してきたパートナーである。HCWHは近々、世界の病院を招待してグローバルグリーンアンドヘルシーホスピタル（GHH）ネットワークに参加してもら

●大林慈済病院の顔采如、林名男とマレーシア、クアランプール支部の記者である黄照峰。医療の気候変動への挑戦に関する賞を代表して受け取った。  
（撮影・林志勇）

い、「二〇二〇ヘルスケア気候チャレンジ運動を始める予定である。二酸化炭素排出削減 (Mitigation)、災害復旧力 (Resiliency)、リーダーシップの三大課題から各病院が二〇二〇年までに独自の目標を設定して気候変動の緩和に対して努力し、実証しようとの試みである。

慈済医療志業体はWHOの「健康促進病院国際ネットワーク」の一員であり、慈済医療志業体の林俊龍執行長は「健康促進病院及び環境に優しい委員会」の主席を務めている。気象サミットが始まる前、健康促進病院国際ネットワークはすでにいくつもの会議を開催し、林俊龍と各国

COP21では、医療の気候変動への挑戦賞 (Healthcare Climate Challenge Championship Award) の授与式が行われ、慈済医療志業が大きく認められた。大林慈済病院がリーダーシップ金メダルと災害復旧力銀メダル、台中慈済病院が災害復旧力金メダル、関山慈済病院が災害復旧力銀メダルをそれぞれ獲得した。

## 病院の役割

「健康促進病院及び環境に優しい委員会」の窓口である顔采如は公共衛生及び健康心理学の専門家であり、COP21

**豆知識**  
世界の人口が70億で、皆が週に1回素食すれば、毎日、10億人が素食していることになり、肉食のために排出される二酸化炭素を14パーセントも減らせることになる。その上、自前の食器類を使用したり、節水節電や資源の分類など簡単にできることを一人ひとりが始めれば、誰もが気候変動を改善するリーダーになることができる。

の医療団体は認識を共有した。慈済の六つの病院は素食と健康的な食の推進を確約した。動物タンパク質から植物タンパク質に変えた場合、温暖化ガス削減ができると共に、栄養も十分に摂取できるため、気候変動の緩和に着実に貢献している。

に参加して感じる事が多く、自ら課題を掲げた。

一つは、台湾と他国の病院及び地域社会の連携を密にし、重大な災害が起きた場合に全員が役割を担うことである。

それも病院の復旧力とリーダーシップに関係しており、医療人員や大衆、患者に災害時にすばやく対応できるようにさせるだけでなく、復旧力を養うことでもある。

そもう一つ、気候変動の問題を重視すること。「私たちが患者のケアをよくしても、患者が社会に戻り、住環境が汚染されているために再び病院に戻るよう

な悪循環が起きては意味がありません。ですから患者の住環境が健康的で、病院に戻る必要がなくなるのが私たちの最終目標なのです」。良い住環境から生命を守り、ケアの質を向上させることで健康を守ると共に、地球の温暖化を抑えることで愛を守ることが上人の言う「清浄は源から」であることが顔采如は悟った。

「やっていることは微々たるものにか見えませんが、その効果は絶大であり、皆がその観念を持っていけば、自分の行動や生活において正しい方向に向くことができるのです。たとえば私が素食し、自前の食器を持ち歩き、できるだけ歩くよ

二〇一〇年、「健康促進病院及び環境に優しい委員会」が設立されたが、林名男は海外で会議に参加した時、必ず素食について触れている。それは慈済の特色を出すためだけでなく、健康に有益だからである。もちろん、病院によってはそうすることに困難が伴うところもあるが、林名男は少しずつ行うよう勧めた。一月に

●2015年11月13日夜、フランスのパリで連続テロ事件が発生し、多くの犠牲者が出た。怯える人々の心を慰めるため、慈済は12月6日に祈りの会を催し、COP21に参加した人員を招待して感想を述べ合い、合同写真を撮った。(写真の提供・慈済クアラルンプール支部)

うにしているように、です」と顔采如が言った。

## 自分の行動から地球に影響を与える

二〇〇九年三月十四日、台湾素食栄養学会が設立したが、林名男副院長はその時から今に至るまで素食を続けている。これまでに素食に関する文献を読み、素食による栄養の研究をしてきたが、健康と環境に対する素食の良さを理解するようになり、自信を持って一家で素食をしている。



一回から週に一回というように次第に進めていけば、いつかはその成果を見ることのできるのである。

「世界の人口は七十億で、全ての人が週に一日素食すれば、十億人が素食しているのと同じことになります。そうすれば、肉食して排出している二酸化炭素を十四パーセントも減らすことができるのです」。そして自前の食器類を使用し、節水、節電、資源の分類と共に、消費を抑え、簡素な生活など各個人が生活習慣を変えれば、気候変動の改善に期待が持てるようになる」と林名男は強調した。

連日の会議を通して、林名男は同僚の

顔采如や慈済アメリカの若者、マレーシア大愛テレビ局の人も参加しているのを見て、自分たちの理念を世界の人に伝えたいことが慈済だけでなく、世界に希望をもたらずだろーと感じた。

「今回、十数日間、パリの師兄や師姐たちのお世話になり、とても感謝しています」。林名男は次にパリに来る時は、慈済ボランティアの情熱を感じるだけでなく、世界の気候が改善されていることに期待した。

(慈済月刊五八九期より)

### ■ 静思語

#### 【人多ければ力大きく福也大なり】

人多ければ力大きく福也大である。どんなに大きな蠟燭であってもその光度には限りがある。ところが小さな蠟燭であっても、明かりを点したあと千万本の蠟燭に引火するならば、この千万本の燭光がすべての暗い隅々を明るく照らすことができる。



## 【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願／絵・林淑女

# 命がけの奉仕ゆえ に貴い命

時は音もなく過ぎ去ってゆく

貴い命を時と争って奉仕し

人生を無駄に過ごさない



毎日の早朝三時過ぎに瞼を開けると、私の頭に浮かぶのは「感謝」という言葉一つのみ。過ぎ去った時の平安に感謝、そして今日あることを感謝。忙

しく午前中を過ごし、一日の大半が過ぎてても、なおやりのこした多くの気がかりに思う。夜の九時に就寝し、一日が幕を閉じます。「今日も一日が過ぎた」と、自分の命が一日少なくなつたことを感じ入り、戒められます。

誰も自分の命の長さを予知することはできず、明日が先にくるか、無常が先か分かりません。ただ私に分かることは「急がなければ」ということ。ですか

らどんなに疲れても、一秒も無駄にせず生命の価値を存分に発揮するよう心がけています。

人の一生は秒の積み重ねから成り立っています。時を無駄に過ごすとは、空しい人生になります。音もなく過ぎ去っていく時は、少しの時間も残してはくれませんから、時を大切に善用しなければなりません。命は「奉仕」してこそ貴いものであり、人生を無駄に過ごさないようにしなくてはなりません。

人の一日の始まりはまつさらの紙のようです。この白紙にどんなドラマを書くのか。それは自分の一念にあります。

自分自身の人生のシナリオですから、価値のあるシナリオを書いて素晴らしい人生を描き出しましょう。

苦しく短いこの人生において自分の幸福のみを求めず、苦しみにいる人の中に入って、その苦痛を和らげましょう。人々の幸せを願うこの世の菩薩たちが、喜んで人々の間に分け入って精進し奉仕しているのを見る度に感動させられます。「福は喜んで為した中にあり、慧は善解によって自在が得られる」。日々喜んで、見返りを求めず、世の中に造福する人生は価値のある人生です。

人心が調和されていないと

万事は平穏になれない

素食は二酸化炭素を減らし

災いを少なくする

二〇一五年が過ぎて二〇一六年に入りました。年始に当たって、多くの国々では巨額を投じて、惜しげもなく花火を打ち上げて新年を迎え、民衆は徹夜して新年を迎えます。しかしながら、こんな時に世界の片隅の生を求める苦難の人々にとって、何の楽しみがあるのでしょうか。

イラクではこの一年間に武力衝突と

テロが発生し、少なくとも七千五百人以上が犠牲になりました。レバノンでも、百万人以上のシリア難民が風雪の中、テント生活で寒さを忍んでいます。子供たちは、逃げ延びる途上で無慈悲な扱いを受け、心に生じた恨みをどうすればなくすことができるのでしょうか。人禍だけでなく、気候変動によって頻繁に天災が起きていることも心配させられます。

昨年十二月、フランスのパリで国連気候変動枠組締約国会議が行われ、百九十を超す国の元首や代表者が、どうすれば極端な気候変動を食い止め、改善できるかについて話し合いました。たとえ経済

利益を放棄できなくても、各国は「二酸化炭素減少を達成する」という共通認識がなくてはならず、その中には環境保全と素食が含まれていました。

肉を食糧として供給するために、人々は大量の動物を飼育し、大量の温室ガスを放出して地球温暖化を加速させています。ですが、動物も人間と同じく殺される時は恐怖心や恨みの感情が起きるのです。

素食は大地を清浄にし、生きとし生けるものと良い縁を結んだことよって善の循環になります。人心に調和がとれていないと何事も「和」は成り立ちませ

ん。

《法華經》に「火宅喻」という話があります。一軒の屋敷で火事が起きているのに、子供たちは気づかず家の中で遊び戯れています。長者が子供たちを呼んでも出てこないのです、仕方なくヤギや鹿の車、大白牛車を使ってついに子供たちを危険の中から連れ出しました。現在地球が発熱しているのは、「火宅」のようで、もしも地球上で生活している人たちが、生活習慣を変えなければ地球の温度は下がりません。人類はどうすれば危険から逃れられ、平安な生活を送ることができるのでしょうか。

カ所の学校で「防災対策希望工程（学校建設）」を施行して古い校舎に防災対策を施しました。

十六年前の台湾中部大地震で多くの学校が倒壊して、台湾の教育機構が普遍的に老朽化していることが分かりました。地震発生時は真夜中で、学生がいなかったことが幸いでした。当時慈済は五十一カ所の支援建設に、防災機能を備えた鉄筋コンクリートを企画しました。私は病院と学校は、どんな災難が起きても絶対に倒壊してはならないと思ったのでした。

子供たちは社会にとって未来の希望

多くの人は廟に詣でて、長寿を祈願します。その実、命を尊び、物命を大切に、地球の平安、万物平安の祈願は自分の長寿健康を修めるものになります。環境保全と素食は災難を軽減しますから、地球の造福と子孫の福を護ることに努めましょう。

慈済の五十年は  
愛で道を敷きつめてきた

終始一貫  
誠正信実は変わらずに

慈済は台東、花蓮、屏東、高雄の二十

であり、安全な学習環境を建てねばならないと考え、全力を傾けて希望工程を推進しました。今ではさらに南部と花東地区に「防災希望工程」を推進し、いざという時の災難に備えています。

二年前南部を行脚した時、委員の一人が大部分の屏東の学校が危険家屋になっていると言いました。私は心配でなりません。それに台湾は地震帯の上にあるので、授業中に地震が発生したら被害は甚大です。ですから花蓮へ帰るとただちに営造部の職員を検査に行かせました。すると、五カ所の学校で老朽化が目立ち、鉄筋が露出していることを発見しま

した。しかもコンクリートは触るとぼろぼろになつて落ちるほどでした。

次世代の安全を護るため、慈済は二〇一四年に屏東県と契約を結んで、危険家屋を撤去し新校舎の建設を始めました。一年半が経ち、屏東県の建築が終わりに近づいた頃、校長が冬休みが終わったら新校舎に入ると報告してきました。慈済は五十年來このように台湾を護ってきました。なぜなら台湾のこの土地に愛情があり、慈済は使命感と責任がありますから。

五十年に亘る慈済の愛と情は終始変わっていません。「大愛の道を広く世界

清らかな清流はこの世を潤す

善美の記録は、典範をとどめる

今の世界に邪悪な感情が渦巻いているのを感じ、暴力と憎しみがはびこっていることに、フランシスコ・ローマ教皇は二〇一五年の年末のスピーチで各宗派の協力を呼びかけました。メディアがもつと多くの社会の良い面を報道して人々を啓発し、暴力で覆われた雰囲気をも鎮めさせなければなりませんと訴えました。教皇は正義の声でメディアの反省を促し、社会の人々に有益な報道をするようにと願っています。

に、古より変わらぬ長い道の道」との一心で邁進してきました。台湾の花蓮で始まってから半世紀来、台湾国内のほか九十カ国以上の国々で無数の苦難の人を援助して参り、「台湾の愛」は各国で有名になっています。

「静思法脈の道に励み、慈済宗門の人間道」、この法脈をいかに伝承し強固な宗門を築くのか。それには皆が「法」に帰依し「誠正信実」を以ての心、人の中に入っても影響を受けず、変わらせずに持戒、修定、生慧、精進に励んで、「慈悲喜捨」の心をもつことです。

現代の科学技術の発達にともなう、どの人も気ままにネット上であらゆる消息を知ることができます。ですが、その消息は真実か嘘か、人々に対して有意義なものかそうでないのかを確かめなかつたら、悪意のある消息、間違った消息は社会を攪乱する元になります。

世界に災難が頻繁に発生していることは、人心が偏り「無明の網」に覆われているからです。終日頭を下げていて、広い世界が見えず容易に無明の網に覆われてしまいます。皆さんが心正しく、この世に造福し危害を与えないように願っています。

人心の無明混濁は法水で洗い清めねばなりません。一九六七年七月二十日に発行された「慈濟月刊」創刊号に、印順導師は「仏陀の慈悲を懐に、大士の芳蹤を追う」とお書きになって、それが慈濟人文志業の始まりになりました。一九九八年の元旦に幕開けした大愛テレビ局は、十八年経った今、その一貫とした「真実の報道」は人々に愛を鼓舞し、孝行と善行は待てないと啓発してきました。

人文は清涼のごとく人間（この世）を潤すことができます。人文志業の責任とは人心を清め、社会に平和平安をもたら

すことで、慈濟人文志業の職員並びにボランティアによつて、観衆が社会の温かい一面が見られることに感謝しています。この時代の善美の記録は次世代の人文と倫理教育になります。

年始にあたつて三つの祈願

人心の浄化  
社会の平穩  
天下に災難のなきよう

八仙樂園プールで粉塵爆発が発生してから半年が経ちました。負傷者のリハビリの道は険しく、彼らが暮らす地域の

慈濟ボランティアはいつも付き添っています。正月の祝賀会に何人も負傷者が参加して、壇上で自分の経験を話しました。彼らは明るくしゃかりしていて、医師たちと抱擁し、医療スタッフと社会の人々に感謝を述べていました。

台湾はこんなに重大な災難を経験し、多くの人が重傷を負いましたが、社会全体が団結して自分のことのように関心を寄せ奉仕し、医療スタッフも全力を尽くして命を救いました。海外の人たちはこれを「医療の奇跡」と言っています。これから見ても台湾は本当に宝島で、善を以て、愛を以て尊しとして

心は豊かです。

二十年前の新年、私は三つの祈願をしました。人心の浄化、社会の平穩、天下に災難のなきようにと。この「新春の三願」はまた、以前から今に至るまで不変の心願です。新しい年を迎えるにあたって、私は感謝の心を以て一年を送り、真心を以て新年を迎えます。

一刻も忘れずに真心を以て、人、事、物に当たりましょう。すべてに穏やかな気持ちで向かい合えば毎日が平穩で、吉祥福慧の年になります。皆さんの一層の精進をお祝りしています。

【国際援助】

## エボラ出血熱の治療施設へ赴く 私の故郷シエラレオネ共和国

◎文・ステイブン・T・フォンバ／訳・黒川章子

写真提供：慈済米国総支部

長い間、私は慈悲の心を以て人々を治癒することを夢見てきました。

貧困と病苦について理解を深め、真に苦しみから解放できる非営利組織によってそれを成したいと。

私はシエラレオネの国に生まれた者として、自分が慈済を代表してエボラ出血熱治療施設へ赴くことに胸を震わせていました。

そこは感染病にみまわれた私の故郷なのですから。

●エボラ出血熱隔離検疫機関の検査を乗り越えたセントジョージ孤児院の子供たちと慈済ボランティアのステイブン・フォンバの記念写真。援助への感謝をこめて。



—— 一九九一年にシエラレオネ共和国で内戦が始まり、東部の住民は生きる場所を失いました。私は家族と一緒に隣国ギニアへ一度逃げましたが、また戻って首都フリータウンで庇護を求め、一九九六年、祖母と一緒にアメリカのカリフォルニア州に落ち着きました。二〇〇六年と二〇〇七年には故郷の家族を訪ねたのですが、その時の心境は言葉にならないほど複雑だったため、その後七年間帰国していませんでした。

二〇一三年の末、西アフリカでエボラウイルスが爆発的に流行しましたが、最も深刻な三つの国はギニア、リベリア、

そしてシエラレオネでした。亡くなった方の数は少なくとも一万一千人と言われています。エボラウイルスは唾液や血液、涙、尿などの体液から伝染しますが、感染者の多くは看護をしていた家族だったのです。最終的に一家全員が亡くなるという最悪のケースも少なくありませんでした。現在有効な治療薬もなく、死亡率は七十%にまで上りました。

この三方国は公共の衛生機関が正常に機能していないため、正確な感染状態の診断や追跡、隔離と收容そして感染の疑いのある人とすでに感染している人への治療などが行われていなかったのです。

民衆は皆貧困に喘ぎ、就学率も低い上に古い民間信仰の文化が根強くあることも、感染の急激な広がりに拍車をかけたといえます。例えば死者に沐浴を施すなど、医療関係者にも現代医学が広まっていないため、古い民間療法に頼ってしまったのでした。そのほか、政府は非政府組織と協力して対策を練らなかつたので、傷の上に塩を塗るかのごとく、感染の抑制も救助もさらに困難を極めていました。

私は故郷の同胞がこのような状況で亡くなった悲しみにいたたまれなくなりました。その中には最愛の家族もいたのです。私の叔父のエマヌエル・サキーラは

交通事故に出くわし、その負傷者がエボラウイルス感染者だと知る由もなく、ただ見捨てられずに負傷者の救助を行ったために感染し、帰らぬ人となりました。叔父を看護していた親戚も感染し、ウィルスはその村全域に蔓延してしまいました。親戚を含めて十二人が感染し、そのうち七人が亡くなりました。

### 国境を越えて手を携え愛を伝える

私が慈済に出会ったのは二〇一三年のことでした。アメリカ・カリフォルニア州セントガブリエルバレーのホームレス

支援機構で責任者をしていた時、その董事会会員と創立者の一人が慈済の委員の方でした。二〇一四年末、その方から慈済がエボラウイルス治療施設の支援に行

く希望者を募っていることを聞き、私は即刻そのボランティア活動に参加したいと告げました。上人様の教えを学び、慈済の皆さんと一緒に西アフリカで活動したいと考えたのです。

●ヒーリー基金会執行長ベンジャミン・パーラ（真ん中）が台湾を訪れ合作計画に署名。慈済と共にシエラレオネ共和国で配付活動することを表明した。

その後、ロサンゼルスで慈済米国総支部において全世界のボランティアを総括している黄思賢氏、そして米国総会の執行長である黄漢魁氏とも会う機会に恵まれた。この大家族に参加する意志を固めたのでした。

私たちはどのように活動を進めるか話し合いました。当時の国連副秘書長ユムケラー博士と連携をとったところ、私た



ちをヒーリー国際救済財団（三空）とキリスト教同胞愛基金フリータウンに紹介し、協力してくれるよう強く推薦してくれたのです。

ヒーリー国際救済財団の総本部はニュージャージー州にあり、十年来シエラレオネのセラブ病院の建設支援、戦争によって四股が切断された人々への援助を行っていました。一方キリスト教同胞愛基金フリータウンはシエラレオネ西部に慈善機構を設置し、伝染初期の段階から医療機材やベッドリネンなどの物資を提供していました。

私たちは二〇一五年三月に台湾を訪れ

て慈済と備忘録を交わして署名し、シエラレオネの感染収束後再建に必要な援助に協力することを確認しました。この合作は私にとって非常に大きな励みとなりました。私たちは目の前の困難をすべて解決できないかもしれませんが、千人以上に及ぶ貧しい人々を援助し、貧困地区に基本的な医療を施すことができることになったのです。こんな日が来るとは思ってもありませんでした。少年時代にアメリカに渡った私が、故郷の人々に笑顔をもたらすことができるようになるなんて信じられない心境でした。



●エボラ出血熱はシエラレオネの民衆をパニックに陥れた。国民の68%が文盲であるため、公の対策は停滞し、医療資源も欠乏。予防の教育と沈静後の再建にも国際社会の支援を待ち望んでいる。

### 私たちを忘れないでください

第一回目の配付活動は三月中旬に行われました。二つの基金会の皆さんと協力し、政府関係の病院と診療所、非営利組織の診療所、社会福祉と社会的性差別及び児童支援部、国家エボラ出血熱治療センター、そしてエボラ出血熱による孤児院、四肢切断者施設など三十カ所で行いました。

配付活動の間、私たちはこの病気の蔓延が元々脆弱な医療体系に深刻な影響を及ぼしていることを目の当たりにしました。病院の設備は治療センターに運ばれ、

ほとんどの医療物資もこの病気のために使われているのです。最も悲劇的なことは、この病気によって両親や家族をなくした孤児が生まれてしまったことです。孤児の年齢は乳幼児から青年にまでわたっています。

この世に生を受けた子供にとって、幼児期は最も楽しく愛される時代であるはずなのに。しかしシエラレオネでは全く逆で、苦しみに耐えねばならない時期なのです。

シエラレオネでは千人中二百七人が五歳の誕生日を迎えることなくその人生を終えます。医療体制と物資が欠乏して

め温めてくれる人はいないことを、身を以て思い知るしかないのです。両親が人生を導いてくれることはなく、自分で生きていかねばならないということを、短い時間の中で自覚しなければなりません。

私たちはリバー二号、エレンタウン、ニユートン、セントジョージの四カ所の孤児院で多くの愛らしい子供たちに会いました。悲しむべきことに、彼らのほとん

●2015年3月から12月にかけて3度にわたり配付活動を実施。現地の協力団体と共に居住地、関係機構、孤児院に赴く。

るため、難産になると妊婦の多くは自分の子供に会う前に人生を閉じています。生を受けた子供たちも、貧困と文盲、そして政治腐敗の中で苦しんでいます。この二年間はそれに加えてエボラ出血熱が流行し、命は取り留めても孤児になっているのです。

彼らはまだ「死別」という言葉の意味を理解することすらできないというのに、世話する人さえ不足している孤児院に押し込められて自分で生きることを学んでいます。「お母さん」「お父さん」と呼んでももう誰も応えてくれないことを、どんなに辛くて眠れなくても優しい声で慰



どは両親に何がおこったのか、なぜ見知らぬ人と一緒に暮らし、家には帰れないのか、次の食事はどこにあるのか、全く分かっていませんでした。そして貧しい子供たちは着のみ着たまま、靴さえはいっていませんでした。

政府と非政府組織には孤児院を支援する財源もないので、「子供が家族親戚と巡り会う会」という活動を企画することになりました。しかし残念なことに、多くの子供たちの家族が感染を恐れ、子供を引き取ることを拒否したのです。医療関係者は子供達は感染していないことを説明しましたが、家族は病気への無知と恐怖

私たちは四カ所の孤児院に入所する二百人を超える孤児と職員に三カ月分の食糧を送り、食器や夜具も提供しました。これらの物資を自ら届けた時、子供たちと関係者の嬉しそうに輝く笑顔を目にしました。しばし心に負った傷を忘れられたかのようにでした。私たちが孤児院を去る時、子供たちは感謝の歌と笑顔で見送ってくれました。まだ感染の拡大は免れません、子供たちは嬉しさのあまり私たちと抱き合い、手をとって感謝を表してくれたのです。その気持ちを忘れないでいてほしいと願います。

エボラ出血熱によってシエラレオネの

もあって子供達と接触したがりませんでした。

首都フリータウンのセントジョージ孤児院は、かつて国際的にニュースにもなりましたが、経営者がエボラ出血熱感染地区の孤児を受け入れたために自身も感染して死亡、彼をサポートした妻もウイルスに感染し亡くなったのです。孤児院はその後二十一日間隔離検査を受けることになりました。この出来事は関係者に大きなショックを与え、孤児たちを心配しました。その三週間、どんなに彼らが恐れおのきながら生活したか、想像を絶するものがあります。

民衆は恐怖と失望の淵に落とされましたが、慈済は公共衛生機関の関係者に希望の光をともしたと言えます。とくに非営利団体と孤児院に対して再建を促したことは大きいです。そして慈善団体がお互いに協力しあうことで配付活動による援助だけでなく、民衆の考えを変えていくことができたこと、そのことは私に深い感銘を与えてくれたのでした。

二つの慈善団体が協力してくれたことに心から感謝しています。配付活動をスムーズに行うことができました。私は、また故郷にもどってさらに多くの人々に尽くせるよう切に願っています。

## 【喜びの発見】



(撮影／丁茂生)

# 敗北を認めず 自分を啓発し続ける

◎口述・蔡天勝／文・陳美羿／訳・黒川章子

出所しても再犯率は約八十%に上るという。  
愛情に包まれることで自分の中にある善の心を堅く  
信じ、その時々々の初心に戻って、本当の自分をもう一  
度受け入れてほしいと願う。

十六年前、私は薬物販売の罪で実刑判決を受けました。獄中では読書と書き取りの練習をして過ごしました。初めは「心経」を写経しようとしたのですが「心経」の意味が分からない、そこで側にあった色あせた「静思語」を書き写しているうちに、思いがけず書きながら考えが深まっていったのです。そしていろいろな思いがこみあげてきました。

それからまもなく、母が車椅子で会いにきてくれました。四回目の脊椎手術を終えたばかりの体で、車椅子から立ち上がり、四つ足の歩行器に捕まりながら私の方へ向かって歩き出すと、不注意にも

倒れてしまいました。父が抱き起こそうとするも力が足りず、抱えることもできません。自分はこんな近くにいるのに、老いた親二人のもどかしい姿をただ見ているしかないのかと、私はその瞬間泣き崩れてしまったのです……。

刑務官の助けで母はやっと起き上がり腰かけました。私は泣き震えながらインターホンを握りしめ、問いかけました。「体が悪いのに、なんで来たりするんだ？」。母親はこう答えました。「我が子には会いたいものなんだよ」。そう聞いて胸がはりさけそうになりました。「いっそ死んでしまいたい」とまで思いつめ、こ

んなに両親を苦しめていたのだと思い知らされたのです。このことがあって私は目が醒めました。

\*\*\*

幼少の頃の私は成績もよく、クラスの班長に選ばれ、市長賞まで受賞する模範生でした。中学校に入ってから、悪い友達とつき合うようになり、授業をさぼって悪い遊びをし、喫煙を始めました。高校時代は暴力団の下部組織に足を踏み入れ、喧嘩や窃盗を繰り返しました。兵役を終えた後も組頭を気取って群れて歩き、

しだいに薬物に溺れ、それが原因で薬物販売にまで手を染め、結局手錠をかけることになったのです。

台中の拘留所で一審の判決は無期懲役であると聞いた時、これで自分の人生は「終わった」と思ったものです。しかしその時はまだ見栄を張ってただ怒りに身を任せるだけで、心を入れ替えようとはしませんでした。あの日、両親が会いにくるまでは。あの時ようやく、自分の心がただ頑なで幼稚なばかりに、こんなに親不孝なことをしてしまったのだと気がついたのです。

夜も眠れないので、片っ端から本を読

みあさりました。「了凡四訓」という本で、了凡さんが毎日懺悔をして悪行を止め、三年の月日をかけて自分の道を切り開いた話を読んだ時、私も自分の道を変えようと決心したのです。

了凡さんを見習い、一枚の表を作つて赤で自分の善い行いを、青で悪い行いを記入しました。獄中の年寄りや体の不自由な人たちを助けようと、彼らにお湯を汲んであげたり、代わりに洗濯をしたり。しかし、悪い習慣はすぐには改めることができないもので、だんだん青色が増え、赤色の文字は少なくなつたのです。それでも、二カ月が経つ頃、赤い文字が増え

てきて、私自身、自分が変わってきたことを感じ始めました。

私はベジタリアンを志し、毎日お経を唱えました。仏を拝み、懺悔し、善い書物を読み大悲咒を写経しました。獄中の友人はそんな私の態度を見て「ちよつと違ふ」と思ったようで、私のことを「師兄」などと揶揄していました。私はそれにはおごらず、善行を重ね、しっかりと自分を作ることに努めました。初めて「慈済月刊」を目にしたのはこの頃です。一度読んではまだ繰り返し、読めば読むほどに感動したのを覚えています。もしここから出られたならば必ず慈済に行つて

ボランティアをしよう。そんな思いから私は證嚴法師さまに一通の手紙を書きました。そして父親にそれを慈済の台中支部に届けてくれるよう頼みました。手紙の中で法師さまの書いた本を送ってほしいとお願いしたのです。

無期懲役の判決を受け、最高裁判所に控訴することにしたのですが、その時、獄中の友人は私に罪を認めないよう勧めました。私は逆に自分の考えを曲げませんでした。私は裁判所で一切の罪を認め、懺悔の気持ちを言葉にしました。裁判官に私が悔い改めたいと強く念じている思いが伝わったのでしょうか、意外なこと

時、私はすでに四十五歳でした。

仮出所から一カ月してパン職人の仕事につくことができたのは、監獄でパン作りを習ったおかげです。慈済に参加しようとおトバイで台中支部まで行ったのですが、ぐるぐると周りを二周回っただけ、自分がこんな人間であることが恥ずかしく、中に入ることができませんでした。その後、勇気をふりしぼってドアをくぐったものの、やはりうまく言葉にならず、献金さえできずに「静思語」を読んでそそくさと帰ったのです。

私は電話で話をすることにしました。やっとの思いで言い出した一言―「献金

に「無期懲役」は八年の実刑判決になったのでした。

一件落着いたところで私は再度證嚴法師さまに手紙を書きました。慈済人になりたいと願をかける内容です。将来は献体することまで考えていました。その後、静思精舎の師父が書籍や録音テープを送って下さるようになり、おかげで私は監獄の中にあっても希望に満たされて過ごしました。

\*\*\*

六年間の服役の後に仮出所となった

したいのですが……」。そして慈済委員の楊秋霞さんが家まで訪ねて来られたので、「恥ずかしながら私は更生した人間なのです」と自己紹介をしました。あろうことか楊さんは私の言葉を笑い飛ばして言いました。「私も昔は酒場を経営していたんですよ。慈済の門は誰にでも開かれています。あなたの今が大切なのであって、過去は要らないのです」と。そうして楊さんに伴われてやっど慈済へ赴き、ボランティアに参加させてもらったのです。

それから師兄師姐の温かい計らいにより、私と三人の更生人は證嚴法師さまに

会えることとなったのです。法師さまは私をご覧になりおっしゃいました。「悔い改めたのですね」。そしてこうもおっしゃいました。「危いと思ったら戻ってくる勇氣を持つ者が本当の英雄なのですよ」。私はその場で溢れる涙を抑えることができませんでした。

善の念に気がついたことはきつかけにすぎません。変わったとはいっても、小さな悪い習慣はなかなか治らないものです。口先ばかりで気ぜわしく、衝動に走り、人と衝突する。こんな私が正しい道を歩き続けるようになったのも、慈済が私を悪く言うことなく慈しみ、導いてく

知り合うことになりました。

ある時病院で看護師をしている師姐に請われて、薬物乱用後に飛び降り自殺未遂をし負傷した若者に会いに行きました。彼はまだ三十幾つと若いのにすでに十七年間も薬物に浸っていたというのです。母親は彼のために一千万円近くを費やしていました。なのに二度も自殺未遂をしているのです。幸い二度とも軽傷で済みましたが、三回目にととうとう足は骨折、脊髄も損傷してしまいました。

私は心規を持つよう話をするのですが、心の弱い彼は良い習慣が長続きしないのです。私はあきらめずに毎日彼を訪

れたおかげだと言えます。慈済の四神湯（漢方スープ）とも言える「知に満足し、感謝の心を持ち、善い解釈を心がけ、包容する」という精神が私の心に沁みわたったからなのです。

見習い、研修を経て、私はようやく慈誠隊員の認証を受ける機会にたどり着き、晴れて慈誠隊員となりました。ボランティアの務めにはできるだけ参加しています。私が更生した人間ということで、気持ちが分かるからか、薬物乱用者や出所したばかりの人があれば、師兄たちに招かれてカウンセリングの手伝いをすることがあります。おかげで多くの「仲間」と

ねました。一緒に過ごし、時には師兄たちにも一緒に励ましの縁を結んでもらいました。この「結びつき」の甲斐あって、彼は二度と薬物に手を出さないと誓いを立て、母親と共に慈済ボランティアに参加することになったのです。

私のことが報道されると、たくさん薬物乱用者が自らあるいは人の勧めで私の所へ「カウンセリング」に訪れるようになりました。そのような人に対して私はいつも、自分が通って来た道に彼らがいることを思いやり、「こちらへ引っ張ってやろう」という気持ちでいました。しかし、二、三年が過ぎた頃、私はただ熱意を

抱くだけではだめで、慈悲には智慧の蓄えが必要だと気がつきました。薬物をやめ、悔い改めるには、自分も覚悟が必要なのです。決心し心を強く持たない限り、他の人を助けることはできません。他の人のために自分がどれほど苦しんでもそれは無駄なことなのです。

九年前、私は友人と台中で菜食レストランを開きました。目的の一つは菜食を広めるため、もう一つは就職の場を作るためです。店の定員はみんな「仲間」なのです。

その多くの「仲間」の中で、林朝清こそ本当の「仲間」といえます。私たちは

い、休憩時間には環境保全ボランティアをしていました。

この頃、私は百人近い薬物乱用者と面会していたので、ストレスや挫折感を感じることもありました。しかし、法師さまのお立場は私の何十倍、何百倍ものストレスを感じるはずだと思い直し、私はもう一度目標に向かって前に進もうと自分を励ましました。よしまたやるぞと。

今までで一番心が傷むのは阿隆のことです。彼は何度も出入所を繰り返したので家族からも見放されていました。私は彼を環境ボランティアに連れ出し、ここでこれまでの罪を悔い改めようと励まし

獄中で知り合いました。彼が先に出所し、また戻ってきたのですが、私が出所後に慈濟へ入った後、彼は出所三回目にして私を尋ねて来たのです。私は言いました。法師さまは私たちに「悔い改めることはできる」「危ないと思ったら戻ってくる勇氣を持つ者が本当の英雄だ」とおっしゃってくれたのだから、志を立てよう、二度と薬物に手を出さないと。

林朝清の母親は彼と一緒に菜食レストランで働いています。経営はすこぶる順調で、「仲間」たちは労働の辛さに耐え、夏は酷暑にむせかえる厨房で汗だくになりながら、冬は冷たい水で野菜や皿を洗

ました。しかし、意志が弱かったのです。よう、またも薬物乱用者として逮捕され、マスコミに一大スクープとして扱われたのです。「慈濟ボランティアが薬物を乱用し再逮捕される」。私は天を仰ぐしかありませんでした。彼をボランティアに連れて行っただけなのに勝手に慈濟ボランティアと呼ばれてしまったとは。

人を導くはずがこんな結果になったので、私は法師さまと慈濟に申し訳なく思いました。しかし、阿隆はどうしたらいいのか？ 見放すべきか？ ケアを続けるべきか？ 最後に私の中で「不捨衆生」という四字が勝ちました。私は率直に



●各地の刑務所で説法をする。自分が通って来た道に彼らがいることを思いやり、「こちらへ引っ張ってやろう」という気持ちで。(撮影／羅明道)

シアの皆さんが温かく私を迎えて下さったのです。その上、私の菜食レストランでは、経営はほとんど「仲間」に任せていましたが、料理人の資格をとって名を成す者が現れたのです。彼を励まして支

彼に聞いてみました。「もう一度だけチャンスをやる、それでやめようじゃないか？」

阿隆はようやく目覚めたようでした。苦しみながらもこの悪い習慣を断ち切り、決めたことを守ると約束してくれました。彼も見習いから始め、研修を受け、十戒を守る一人の慈済人になることを誓いました。法師さまは私を労りながら慈しみ深く言葉をかけてくださいました。「このような救いの道は普通の人にはできないことはありません」。身も心も疲れきっていましたが、歳末祝福会で「仲間」が悔い改める姿、受証をすませ慈誠隊員と

なる姿を見た時、客席にいた私は感極まってむせび泣いていたのです。

私の生き様は二〇一一年に大愛テレビ局でドラマになりました。「荒波を乗り越えて」という題で連続五回放送でした。その後、九十分のダイジェスト版に編集され、法務部と教育部に各三千六百部が送付されたそうです。私も刑務所や学校に招かれて話をし、薬物反対のキャンペーンに一肌脱ぎました。

この時期、私は陳乃裕師兄に付き添って台湾各地の刑務所と学校を巡回しました。慈済という大家族には本当に感謝しています。どこへ行っても慈済ボランティア

店を出すよう勧めています。

元受刑者そして更生した人々を長年ケアしてきた慈済ボランティアの方々は、私が疲れを押して何かに焚きつけられるように各地を駆け回って説法をした結果、経済的にも健康にも赤信号がともったことを察して下さり、私の菩薩の道がこれからも続くよう、私の第二の事業「お菓子工房」の開業を援助して下さいることになったのです。

小さい頃の思い出ですが、製菓業を営んでいた父は家内工場で作っていました。その「美味しいもの」の甘い香りに触れるとなんともいえない幸福感に満た



●彰化県鹿港鎮の頂番小学校で、蔡天勝が小学生たちに薬物の弊害を説明した。（撮影／施育成）

されたものです。私は父の言い残した通り、材料を吟味し、よくない添

加物は使わずに、ヘルシーなお菓子を作って食べる人に安心と喜びを感じてもらいたいという希望を持ち続けていたのです。

今も私は各地の刑務所、学校、軍隊で説

して表彰されるまでに更生した。この大きな変化は、私にとって後悔を伴うと同時に深く感謝の念を思い起こさせるものです。

後悔するのはもちろん、薬物に溺れ、社会に害を及ぼし、両親を苦しめた年月であり、感謝しているのは、慈済が慈しみで私を受け入れ、導いてくれたことに対してです。そのおかげで今日の私がいるといっても過言ではありません。ある時花蓮で薬物乱用防止キャンペーンに参加したとき、法師さまが表彰状を授けてくださいました。私に微笑みかけ慈悲に満ちた声で「おめでとうございます！」と

法をする機会がありますが、家にいる時は弟と一緒に体の不自由な母を介護しています。どこにいても読経すること、仏を拝み願をかけること、懺悔をすることにしています。私は、自分に厳しく戒律を課し、少しの間違いも二度と繰り返してはならないことを約束したのです。

二〇一四年六月三日、私と林朝清は台北の「全国薬物乱用防止運動」で功績を認められ表彰されました。呉敦義副総統から表彰状を頂いた時、万感の思いがこみ上げてきました。一人の元薬物乱用者、薬物販売で無期懲役の判決を受けた「はみ出し者」が、こうやって「功労者」と

言葉をかけて下さったことは忘れられません。

慈済ボランティアに参加して十年が経ちました。私が受け取ったと同じ温かさを誰かに与えることができるよう、皆の「初心に帰った自分」が受け入れられる機会を作っていきたいと思っています。間違いを起こしたと分かったなら、懺悔しましょう。その痛みを受け止めてさえいれば、慈済の人々は両手を広げ、帰る場所を求めて迷える者を永遠にその懐に迎えてくれるのです。

（本文は慈済道侶叢書『もっといいい自分に会った』より抜粋）



# 信念を貫いて 忍耐力を高めよう

信念と信力を貫き、根性と忍耐力を高めて奉仕しよう

心の本質を啓発しよう

南アフリカ・ダーバンの慈濟ボランティアは、仏法を広めようと昨年の九月から南方のイースト・ロントン、キングウ

◎文・釋徳侃／訳・心榮

イリアムズタウンそしてポート・エリザベスへ奉仕に出かけてきました。往復二千キロを越える道程を七回も往復しました。そのある日、キングウイリアムズタウンのある村に辿りついたボランティアたちは、お葬式が行われているのを見かけ、米を持参し訪ねました。この気遣いに喪主は強く心をうたれたそうです。

朝会の時、上人は、「南アフリカの黒人ボランティアたちは、自分の生活も決して余裕があるわけではないのに、喜んで他人のために尽くすのです。遠い道程と途中での粗末な宿泊状況にも耐え、そして民族や宗教の壁も乗り越えて、ただ出会った人々を濟度しようとの一心から行動したのでした。このように信念を貫いた彼女たちはまるで輝く『黒い真珠』のようです」と褒め称えました

「彼女たちは伝法に出ている間も毎日早起きし、『法の薫りに浸る』時間を持ちました。法の真髄を心にしっかりと記憶し、人間



の苦しみを痛切に感じたからこそ、今この時に礼儀正しく整然とした態度で以て他人のために尽くすことができるのです。貧困家庭に寄り添って細心にケアするだけでなく、彼らの生活を改善しようとして手を差し伸べました。人が本質的にもつ善の心を啓発し、心身ともに豊かになるよう懇切に導いているのです。『心して力を尽くせば、何事もやり遂げられるはず』ということ、ダーバンの黒人ボランティアが示してくれました」

「ダーバンでのボランティアが艱苦の環境に耐えて精進を重ねている姿は、まさに慈済の発祥地台湾の慈済人にとっても模範そのものだったと言えます。『甘んじて尽くす、喜んで受ける。日々怠らず精進する』という精神を見習うべきです」と上人は皆を励まされました。

衆生の根機はさまざまです。仏陀の教えもそれに応じて人々の心を導き、正道へと教化するのです。人の習性や心性、そして根機の鋭さや鈍さの違いが生じたことも、過去世に積み重ねた修行や因果関係で成り立っているのです。「前世に良い種を植えることができれば、良縁が結ばれます。それ故に幸福な今生を送ることができます。もし、いつもつまらない悩みや無明にとらわれていると、大きな障害となることもありうるのです」と上人は諭されました。

法を聞く、考える、そして修行を精進すれば、法の道に深く通達し物事に支障なく進んでいくことができます。法を心身に沁み入るほど理解してからたえず努めていくことが大切です。信念を堅くし、根性、根気を以て衆生のために奉仕しましょう。

## 命の価値を高めよう

「医療に従事するということは、人の命を護るということです。



教育に従事するには、慧命を増していかなくはなりません」。慈濟の四大志業（慈善、医療、教育、人文）の計画を話し合う会議で、上人は、「現在、医療や教育に従事する人は、昔にくらべ多岐にわたる困難と要求に直面しています。志業全体が互いに提携しながらつながりを強化するように、六院（花蓮、新店、台中、大林、関山、玉里といった六つの病院）を一つの家族、四校（慈濟大学、慈濟大学付属高等学校、慈濟科技大学、台南慈濟高等学校）を一つの家族と見做して、皆が力を合わせ、同じ方向に邁進するよう期待しています」と励まされました。

「私は発起人となって大勢の人々の愛の心を募ってきました。また、病院や学校という建物も建設しました。そして今は、各分野の専門知識を持つ貴方たちに全てを任せましたので、皆が志を同じくし、真心で最大の良能を発揮するよう願っています」

「品質を高めるためには、人材をしっかりと育成しなければなりません。新しい人材を育てるとともに、優秀な古參を失ってもありません」

釈迦牟尼仏が入滅されたのは、いまから二千五百年も前でしたが、仏陀の慧命は今もお仏弟子の心に鮮明に生きています。「命の価値は長さから判断するものではありません。人の生とは常にあるものではありません。誰も自分の命がどれくらいあるのかなど分かりません。ですから、むしろ自らその広く深い自分の人生に向かって突き進み、善意に満たされた美しい人生を成就しましょう」と上人は教え諭されました。

（慈濟月刊五八九期より）

# 慈濟大事記

二〇一五年十二月、二〇一六年一月……………

訳・済蓮

1 2 ・ 2 0	<p>◎マレーシアの観光客を乗せたバスがタイ・チェンマイのサジエ町近くで山道から転落し、死者14人と10数人の重軽傷者を出した。タイとマレーシアの慈済ボランティアは慰問と犠牲者への助念を行った。</p> <p>◎慈済基金会は中国で冬季の配付活動を開始した。この日から1月下旬まで河北、天津、遼寧、吉林、上海、江蘇、浙江、山東、河南、湖北、湖南、甘肅、四川、雲南、福建、海南、広西、広東の各地で行われる。</p>
-----------------------	---

1 2 ・ 2 2	<p>◎台風メラー(27号)がフィリピン中部を襲い、北サマール省とヌエバエシジャ省が被害を被った。タクロバンの慈済ボランティアは22日と27日に北サマール省カターマン町で米と見舞金を配付した。マニラの慈済ボランティアは27日にヌエバエシジャ省ボンガボン町とカバナトゥアン市、ガパン市で米と毛布、衣類などの物資を配付した。</p> <p>◎中国フェニックステレビ華人仏教チャンネル情報センターの主任と編集者、レポーターなど11人が慈済人文志業センターを訪れ、交流を行った。今年も大愛テレビ番組《證嚴法師が語るお話》と《歩んできた道を振り返って》を引き続きフェニックステレビ華人仏教チャンネルに提供することになった。双方は2012年より、仏教を基礎にした公益性があり良質の番組を作ることを目標として協力関係にある。</p>
1 2 ・ 2 3	<p>慈済基金会はエボラ出血熱の蔓延と洪水に見舞われたシエラレオネ共</p>

1 2 ・ 3 1	1 2 ・ 2 9	
<p>高雄市苓雅区の慈済ボランティアは人医会メンバーと共に、この日の夜鳳山体育館、八仙公園、中正技撃館にホームレスを慰問し、日用品パツ</p>	<p>26日、アメリカ・テキサス州ガーランド市が竜巻に襲われ、慈済ダラス支部のボランティアが29日、10世帯に緊急の物資引換カードを贈った。31日からは5日間続けてガーランドスポーツセンターでキャツシユカードと毛布を配付し、合計361世帯を支援した。</p>	<p>して温かい食事を提供すると共に、施療と無料散髪及び物資の配付を行った。</p> <p>◎慈済タイ支部は27日、バンコクで難民を対象とした第12回目の医療奉仕を行い、67人の医療人員と100人のボランティアが865人に奉仕した。</p>

1 2 ・ 2 7	1 2 ・ 2 4	
<p>◎慈済基金会と人安基金会花蓮平安支部は合同で「厳冬に暖を送る ホームレスに愛を」活動を催した。80人のホームレスと貧困家庭を招待</p>	<p>中国広東省深圳市光明新区で土砂災害が起き、広東慈済ボランティアは24日、避難所として使われていた衆創アパートへ慰問にかけつけ、毛布と児童図書、保温性の高い衣類及び多機能折畳式ベッド(福慧ベッド)を提供した。12月30日までに延べ200人近いボランティアが動員された。</p>	<p>和国を支援するため、「衣服を募って限らない愛を集結し、遠く離れたシエラレオネに大愛を送ろう」キャンペーンを始めた。これまでに11万9121枚の衣類と24万6000枚のマスクが集まり、この日発送された。</p>

01・17	01・14	01・09	このほかシエルトーに毛糸の帽子と老眼鏡、清掃用品を寄贈した。
<p>台北慈濟病院で歳末祝福感恩会が開かれ、證嚴法師自ら福慧お年玉を手渡すと共に、ボランティア養成講座を修了した慈濟職員たちに委員の認証を与えた。会には2000人を超える職員やその家族、そして来院した大衆が参加した。また、9人の粉塵爆発事故の負傷者も家族と共に参加し、医療人員に感謝の言葉を述べた。</p> <p>慈濟骨髓バンクは初めて造血幹細胞をポーランドに寄贈した。慈濟が寄贈したのはこれで30カ国になる。</p> <p>北区慈濟人医会は新北市貢寮区で今年、第1回目の施療活動を行った。澳底小学校、貢寮活動センター、福連村馬崗、福隆村東興宮、龍門村昭惠廟、和美村保安廟、和美村龍興宮などで施療が行われたほか、3つのグループに分かれて高齢者の往診を行った。</p>			

01・02	01・01		クとジャケット、肌着、靴下、蚊帳及び温かい弁当などを配付した。
<p>中国広東省深圳市光明新区での土砂災害に対して、慈濟基金会と深圳南頭城小学校が協力して100台のパソコンを募り、万測試験設備有限公司の復旧した新工場に寄贈することになった。この日、寄贈式典が行われた。</p> <p>◎フィリピン・タクロバン市ペリコホン地区で1日、火災が発生した。慈濟ボランティアは被災地区に調査に向き、その午後、被災者に物資引換券を配った。2日、86世帯に米と毛布、日用品及び見舞金を配付した。</p> <p>◎慈濟アメリカ・テキサス州支部のボランティアはホームレスのシエルトーで冬季の物資配付活動を催し、252人に毛布と靴下を配付した。</p>			

# 慈濟

2016年2月23日発行・230号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴  
発行所 慈濟基金会  
〒112 台湾台北市北投区立德路2号  
編集 慈濟日本語翻訳チーム  
杜張瑤珍・張涵  
校閲 山田智美  
電話 (886)02-2898-9000  
FAX (886)02-2898-9920  
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈濟基金会日本支部  
〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16  
電話 (03)3203-5651 ~ 5653  
FAX (03)3203-5674  
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw  
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いです。(日文組編集同人)

宗教家である私たちはどのようにして  
社会教育に尽くせばよいのですか？



仏陀の言われる「慈・悲・喜・捨」は正  
に教育の中核であり、精一杯この四つの信  
念を具体的な行動に移して、理念を実現す  
ることです。

訳・済運 絵・蔡志忠／彩色・慮扶  
《清らかな智慧》より